

【科目名】生命のしくみ

【担当教員】松本 弘

【研究室】

【種 別】選択・後期2単位(講義)

【講義の目的】

生命のしくみについては、最近、新聞紙上をにぎわす話題が多い。例えば、iPS細胞、ES細胞、ポストゲノム、遺伝子治療、組換えDNA、形態形成、再生医療、生命倫理、環境倫理、バイオテクノロジー等である。これらのことが、我々の生活にどうかかわってくるのか。特に医療系の道に進むものにとっては知らずにすまずことは出来ない。

生命のしくみ(生物学)は、基本的には生物の共通性と生物の多様性について学習することである。共通性は、分子(DNA、タンパク質)、細胞、個体、エネルギー、自己複製(生殖、発生、遺伝)等である。一方多様性は、遺伝子の多様性、種の多様性、生態系の多様性等である。

以上の生物の共通性と生物の多様性の学習を通じて生物学的に探究する能力と態度を育てる。同時に生物学についての基本的な概念や原理・法則を理解し科学的な自然観を修得する。さらに最新の生物学の成果や知見についても理解する能力を育成する。

【到達目標】

1. 科学と科学の方法について細胞学の歴史を通して理解する。
2. 生態学や環境問題、生物の進化についての理解を深める。
3. 細胞の構造と機能、細胞の成分、細胞膜について理解する。
4. 酵素の働き、同化(光合成)、異化(呼吸)のしくみを理解する。
5. 細胞の増殖、動物の発生過程と形態形成のしくみを理解する。
6. 遺伝の法則とDNAの複製、形質発現の過程を理解する。
7. バイオテクノロジーとその利用について理解を深める。
8. 生体防御と免疫のしくみを理解する。
9. ヒトの感覚器と筋肉の収縮、ホルモン系、神経系について理解を深める。

【授業計画】

1. 科学の方法と細胞学の歴史
2. 個体群の生態学、生態系
3. 環境問題
4. 生物の進化
5. 細胞の構造と機能、細胞の成分、細胞膜
6. 酵素とその働き
7. 代謝(異化、同化)
8. 細胞の増殖
9. 発生と形態形成
10. 遺伝の法則とDNA、ゲノム、ポストゲノム等
11. DNAの複製と形質発現
12. バイオテクノロジーとその利用
13. 生体防御、抗原と抗体、体液性免疫、細胞性免疫
14. ヒトの感覚器、筋肉の収縮
15. ホルモン系、神経系

【成績の評価】

レポート提出、授業態度の平常点で約30%、筆記試験で約70%の総合判定により評価します。

【自己学習】

毎回の授業には予習・復習をして臨むこと。

【履修上の注意】

指定された座席に座ること。自分のノートを作ること。配布されたプリントは整理しておくこと。静穏な環境下で授業が進行するよう努力すること。授業中での飲食や携帯電話は厳禁する。

【テキスト】

「スクエア最新生物図説」(第一学習社) 吉里勝利監修

【参考文献】

必要に応じてその都度紹介します。

【科目名】物質と自然のしくみ

【担当教員】中村 正信

【研究室】診療・研究棟 4 階 410 研究室

【種 別】選択・前期 2 単位(講義)

【講義の目的】

複雑な現代人の生活も自然現象の中で営まれている。医療従事者による、身体ケアの場面や検査・治療・処置の場面においても、自然の法則とは無関係ではない。そこで物質と自然の法則を中心に学び、前提から結論を導き推論に際しての誤りが大きくなることのないようにすることを身につける。半期なので運動や電気などの、専門科目を学ぶ上で基礎となる課題に重点を置く。

【到達目標】

この授業で使用するテキストは、高校で物理をあまり学習しなかった場合でも、自然現象の見方を把握して定性的な理解ができるように書かれたもので、数式をほとんど使わずに説明するよう努力されている。授業ではできるだけ身の回りの事象を題材に取り上げることにより、身近な現象を見る目と科学する心を持つことを目指す。合わせて、専門科目で具体例を学んだ場合に、その内容が理解できるような基礎力を身につける。

【授業計画】

1. はじめに、物体の運動を表す
2. 物理量と物理法則、単位
3. 力とその性質、万有引力と重力
4. 摩擦力と抵抗、力のつり合い、水圧、気圧
5. 速度と加速度、運動の法則
6. 等速円運動、単振動、角運動保存則
7. 仕事、運動エネルギー、位置エネルギー
8. 熱と温度、内部エネルギー、熱力学の法則
9. 波の性質、音波、光波
10. 電荷、クーロンの法則、電流
11. 回路と起電力、オームの法則
12. 磁石と磁場、電流と磁場、電磁誘導
13. 原子の構造、波が粒子か
14. 原子核の崩壊と放射線、核エネルギー
15. 素粒子、ビッグバン宇宙論

【成績の評価】

授業中のミニレポート等の成績（約 40%）と期末試験の成績（約 60%）によって総合的に評価する。

【自己学習】

高校で物理を履修していない学生は、テキスト（配布資料があればそれも）にあらかじめ目を通し、わからない箇所に印をつけておくことを強く勧める。どこまでわかって、どこがわからないかをノートしておくが良い。

【履修上の注意】

この講義はこれまで物理的な思考法になじんでこなかった学生を対象としている。基本から解説し、デモ実験も行う予定である。なお各講義の最後に基本的な演習問題を解く時間をとる。問題の答えを覚えるのではなく、考え方を理解できることが重要である。

【テキスト】

「自然科学の基礎としての物理学」 （学術図書出版社）

原康夫著

【参考文献】

学生毎に状況が違うので直接教員に相談するのが良い。

例としては次のような本がある。

特に最初から勉強しようとする学生向け

「まるわかり！基礎物理」 （南山堂） 栗子研著

数式も避けて勉強しようとする学生向け

「物理学がわかる」 （技術評論社） 川村康文著

【科目名】生命の化学

【担当教員】戸田 静男

【研究室】管理棟 2 階 208 研究室

【種 別】選択・後期 2 単位（講義）

【講義の目的】

生成を構成する物質の構造および機能（はたらき）の基本を習得してもらう。そして、生体機能の関連性についても理解してもらう。

【到達目標】

生命を構成する物質の構造と機能（はたらき）を理解し、医療人としての基礎としてほしい。

【授業計画】

1. 人体の仕組み
2. タンパク質の構造
3. タンパク質のはたらき
4. 糖質の構造
5. 糖質のはたらき
6. 脂質の構造
7. 脂質のはたらき
8. 核酸の構造
9. 核酸のはたらき
10. 酵素の性質とはたらき
11. ビタミンの種類とはたらき
12. 水・無機質のはたらき
13. 栄養素の消化・吸収
14. 生体の恒常性を保つシステム
15. エネルギーの消費と供給

【成績の評価】

学期末試験で成績評価を行う。

【自己学習】

高校で化学を履修していない学生や不安のある学生に対しても習得できるように配慮する。受講後の復習を十分にやってほしい。質問は、大いに受け付ける。

【履修上の注意】

授業計画に従い授業を進めていくが、各項目と関連性なども講義していく。

【テキスト】

「イラスト 生化学入門 （栄養素の旅）」

相原英孝、大森正英ら著 （東京教学社）

【参考文献】

本学図書館にこれに関する数多くの書籍があるので、大いに参考にしてほしい。

【科 目 名】情報科学**【担当教員】** 中村 正信**【研 究 室】** 診療・研究棟 4 階 410 研究室**【種 別 】** 選択・後期 2 単位(講義)**【講義の目的】**

現代の社会にはおびただしい数の情報が流れているが、その中で生活し、働くものとして能率良く必要かつ有用な情報を入力し、それらを整理し、分析する能力を身に付けることは大切なことである。さらに、医療従事者にとっては情報モラルや情報セキュリティも非常に重要である。今後、高度化する医療機器を扱う機会がますます増加することなどから、情報科学・情報技術の重要性を理解し、安全に活用する必要がある。

【到達目標】

コンピュータの操作からはじめて、文章・画像情報処理、データ処理等の技術習得する。これからの学生生活において学ぶための 1 つの重要な力を身につけることを目指す。

【授業計画】

1. 情報社会のセキュリティ、コンピュータの基本操作
2. ワードプロソフトの利用-文章作成と管理 1
3. ワードプロソフトの利用-文章作成と管理 2
4. ワードプロソフトの利用-書式の設定 1
5. ワードプロソフトの利用-書式の設定 2
6. ワードプロソフトの利用-既存データの利用
7. 表計算ソフトの利用-表作成 1
8. 表計算ソフトの利用-表作成 2
9. 表計算ソフトの利用-編集操作
10. 表計算ソフトの利用-数式・関数の活用
11. 表計算ソフトの利用-グラフの作成
12. プレゼンテーションソフトの利用 1
13. プレゼンテーションソフトの利用 2
14. 総合演習
15. まとめ

【成績の評価】

毎回授業中に与える課題に対する提出物の成績（約 60％）と期末試験の成績（約 40％）によって総合的に評価する。課題を授業中に完成できなかった場合でも、出来たところまでを提出すること。

【自己学習】

コンピュータの習熟度は個人のこれまでの学習経験などによって大きな開きがある。講義では各課題に対して授業中に完成させることを重視しているので、特にパソコン初心者は復習よりは予習を強く勧める（予めテキストに目を通し学習内容のイメージを持つことは大変有効である）。

【履修上の注意】

この講義はコンピュータを常に操作する実習形式をとるので、欠席しないこと。多くの課題は互いに関連性が大きいので、完成できなかった課題や、出席できなかった日の課題については、各自速やかに自習しておくこと。なお、講義の資料は後日、学内サーバで入手できる。

【テキスト】

「情報利活用コンピュータリテラシー」 （日経 B P 社）

【参考文献】

「実践ドリルで学ぶ Office 活用術」 （n o a 出版）

日経 B P 社、n o a 出版等のテキスト

【科 目 名】生命倫理

【担当教員】 吉田 宗平・横田 栄夫

【研 究 室】 管理棟 2 階学長室（吉田）・207 研究室（横田）

【種 別】 必修・後期 2 単位（講義）

【講義の目的】

生命倫理という言葉の歴史は比較的浅く、英語の bioethics が初めて使われたのは 1970 年頃である。生命倫理とは、近年の生命科学と医療技術の画期的発展により、生命と医療に関して生じてきた様々な倫理的、社会的問題について議論し、研究することを目的とするもので、医療系学生にとって学ぶべき必須の科目である。

【到達目標】

生命倫理の領域は、医療従事者と患者・一般市民とが医療の在り方について対等の立場で議論しあう場であるので、将来、医療人として、生命の尊厳を守る立場に相応しい素養を身に着けることを目標とする。

【授業計画】

1. 生命倫理の歴史と今日的課題（その 1：吉田）
2. 生命倫理の歴史と今日的課題（その 2：吉田）
3. 患者にとっての医療—インフォームド・コンセントとは？（吉田）
4. 出生をめぐる生命倫理（その 1：横田）
5. 出生をめぐる生命倫理（その 2：横田）
6. 出生をめぐる生命倫理（その 3：横田）
7. 出生をめぐる生命倫理（その 4：横田）
8. 出生をめぐる生命倫理（その 5：横田）
9. 終末期と死をめぐる倫理（その 1：吉田）
10. 終末期と死をめぐる倫理（その 2：吉田）
11. 終末期と死をめぐる倫理（その 3：吉田）
12. 先端医療技術と倫理（その 1：吉田）
13. 先端医療技術と倫理（その 2 吉田）
14. 先端医療技術と倫理（その 3：吉田）
15. 医学研究と倫理（吉田）

【成績の評価】

定期試験あるいはレポートにより評価する

【自己学習】

下掲の参考書等を利用、学習すること

【履修上の注意】

出席、履修態度を重視する。

【テキスト】

特に指定しない。講義プリント等による。

【参考文献】

- 「生命倫理と医療倫理」 （金芳堂） 伏木信次、他編
「生命倫理への招待」 （金芳堂） 塩野寛、清水恵子著
「学生と考える生命倫理」 （ナカニシヤ出版）
金子章道、金内雅夫、川田由美編
「看護学生のための倫理学」 （金芳堂） 改訂 2 版 高谷修
「医学生のための生命倫理」 （丸善出版）
盛永審一郎、松島哲久[編]

【科目名】心と身体健康**【担当教員】** 郭 哲次**【研究室】** 診療・研究棟 4 階 403 研究室**【種 別】** 選択・前期 2 単位（講義）**【講義の目的】**

近年、様々なメディアを通して「心の病」や「心身症」の増加、特にうつ病患者などの著しい増加が叫ばれるようになり、世界的にもメンタルヘルスへの関心が高まっている。一方からだや身体的疾病への、私たちの理解は深まったが「こころの健康」「精神の病」についての理解には、著しい先入観や偏見が多く、十分であるとは言い難い。

ここで、いま、医療人として「私たちは心をどうとらえたらよいのか?」、「心と身体にはどういうつながりがあるのか?」、「健康な心と病める心は異なるものなのか?」のテーマに対してもう一度考え直し、<心と身体の間にも生まれてくる様々な困難や病>を概観しながら、『心と身体健康』について深く考える機会を持つ。これにより、医療人として基本的に身につけるべき『心と身体健康』のあり方を学ぶことを目標とする。

【到達目標】

健康人の心のあり方や基本的なこころの障害を十分に理解し医療に役立てることができる

【授業計画】

1. 総論—こころの健康の概念
2. もの忘れは異常か?（認知症）
3. うつは治りにくい?（気分障害）
4. 幻覚・妄想はなぜ起こる?（統合失調症）
5. 不安は異常か?
—パニック障害から PTSD まで（神経症性障害）
6. 人の行動パターンへの偏りは病気?（成人の人格・行動の障害）
7. 主要な精神の障害のまとめ 主要な精神の障害のまとめ
8. 身体が異常がこころの異常を引き起こすか?
（器質性精神障害、意識の異常を含む）
9. けいれんとふるえの違い?（てんかんなど）
10. アルコールの依存
11. 薬物の依存 または 疼痛
12. 児童・青年期の精神障害（知的障害、心理的発達の障害）
13. なぜ眠れない?
14. スポーツとこころの働き
15. 総まとめ

【成績の評価】

授業態度、レポート、小テスト、最終試験により評価

【自己学習】

テキストで授業予定項目を予習すること

【履修上の注意】

講義はテキスト、プリントやパワーポイントなどを用いて行う。出席を重視する。

【テキスト】

「2 版 精神医学」 （中外医学社）

【参考文献】

適宜紹介する

【科目名】環境と健康

【担当教員】松本 健治

【研究室】

【種 別】選択・後期2単位（講義）

【講義の目的】

人間の健康だけでなくあらゆる生命体の生命の質（ＱＯＬ）は様々な環境要因によって左右される。種々の環境を理解したうえで、様々な環境が人間の心身にどのような影響をあたえるのかを学習する。

【到達目標】

環境と健康の関連についての考え方や環境・健康学の基礎を学習したうえで、具体的内容として健康に影響を及ぼす様々な環境因子と疾病・障害予防対策が理解できるようになり、将来、医療専門職としての基礎的な知識が身に付く。

【授業計画】

1. 環境と健康
環境と人間との相互関係、生態系の営み
2. 物理的環境（その１）
温熱条件、騒音、振動
3. 物理的環境（その２）
電磁波、異常気圧
4. 化学的環境（その１）
空気と健康
5. 化学的環境（その２）
有害化学物質の吸収、体内蓄積、排泄、症状、
障害の予防、変異原と催奇形原
6. 生物的環境
病原微生物、病原体を保有または媒介する動物
7. 生物的環境
寄生虫、有毒動植物
8. 食物環境
食の安全性をめぐって
9. 衣服と住居環境
快適条件、シックハウス症候群
10. 水をめぐる問題
水と健康
11. 公害の人間生活への影響
身体的・精神的・心理的影響、防止対策、
環境保全の原則
12. 地球環境問題（その１）
地球環境と生活、残留性有機汚染物質、
内分泌攪乱化学物質
13. 地球環境問題（その２）
オゾン層の破壊、地球温暖化
14. 地球環境問題（その３）
酸性雨、砂漠化、熱帯林減少、野生生物種減少、
海洋汚染
15. 地球環境問題（その４）とまとめ
地球環境問題への取組み

【成績の評価】

筆記試験（80％）とミニレポートを含む受講態度（20％）で評価します。

【自己学習】

学習内容の理解度を深めるため、講義の復習と事前配布資料で予習することが肝要です。

【履修上の注意】

無断欠席は最悪。毎回ミニレポートを課します。

【テキスト】

1週間以上前に講義内容の抄録と関連資料を配布します。

【参考文献】適宜、紹介します。

【科目名】東洋医学と西洋医学

【担当教員】 鈴木 俊明・金井 成行・谷 万喜子

【研究室】 診療・研究棟 3 階 307 研究室(鈴木)・
4 階 409 研究室(金井)・416 研究室(谷)

【種 別】 選択・後期 2 単位(講義)

【講義の目的】

東洋医学を融合した理学療法を意欲的に学ぶ目的で入学してきた 1 年生を対象に、わが国の臨床における東洋医学(湯液・鍼灸)のみならず、西洋医学を基盤とした東洋医学のあり方・可能性を十分に理解することを主眼とする。

東洋医学の基礎を学ぶことを目的としており、具体的な講義内容は、臨床の中から東洋医学の基礎概念をわかりやすく解説する中で、西洋医学的視点を見失わず、伝統医学の考え方を患者にどう活かすかを毎回テーマを変えて進めていく。また、本学独自の理学療法である経穴刺激理学療法の基礎についても講義する。

【到達目標】

東洋医学の知識の基礎、経穴刺激理学療法の基礎を把握する。

【授業計画】

1. オリエンテーション(授業の進め方について)
2. 東洋医学概論 1: 東洋医学の古典、東洋医学的診断学(証のとらえ方など)
3. 東洋医学概論 2: 東洋医学的治療学
4. 経穴概論 1: 上肢の経穴
5. 経穴概論 2: 体幹の経穴
6. 経穴概論 3: 下肢の経穴
7. 経穴刺激理学療法概論 1: 治療法開発の歴史
8. 経穴刺激理学療法概論 2: 理論と実践 1
9. 経穴刺激理学療法概論 3: 理論と実践 2
10. 理学療法と東洋医学の関連性
11. 漢方薬概論 1: 驚異の野菜パワー
12. 漢方薬概論 2: 痛みに対する漢方薬
13. 漢方薬概論 3: 日常よくみられる疾患に対する漢方薬
14. 総合演習、まとめ
15. 総合演習、まとめ

【成績の評価】

試験 90%、平常点 10%にて評価する。

【自己学習】

1 回の授業内容を十分に把握すること。

【履修上の注意】

本科目は、本学理学療法学科の特徴である東洋医学を理解できる理学療法士を育成する基礎となる大切な科目である。積極的に取り組むことと、実技を取り入れるので全て習得するように努力すること。

【テキスト】

資料を配布する。

【参考文献】

【科目名】生薬の科学

【担当教員】大西 基代

【研究室】管理棟 2 階 209 研究室

【種 別】選択・前期 2 単位（講義）

【講義の目的】

薬並びに食品の素材としての両面から主要な生薬について、どのような成分を含み、有効成分がどのように作用するのかを学び、生薬の重要性ならびに有用性を理解することに講義の目的をおきます。

【到達目標】

現在使用されている医薬品と生薬成分との関連性を理解することを目標とします。

【授業計画】

1. 講義の概要 生薬の概要
2. 生薬の歴史（西洋・東洋）
3. 生薬各論（附子について）
4. 生薬各論（麻黄について）
5. 生薬各論（アヘンについて）
6. 覚せい剤、危険ドラッグ、麻薬の危険性について
7. 生薬各論（キナ皮について）
8. キニーネと薬害について
9. 生薬各論（シーボルトに関する生薬について）
10. 生薬からの成分抽出と薬（アルカロイドを含む生薬）
11. 生薬からの成分抽出と薬（アスピリンについて）
12. 生薬からの成分抽出と薬（抗腫瘍薬の開発について）
13. 生薬からの成分抽出と薬（抗腫瘍薬の開発について）
14. 生薬からの成分抽出と薬（タミフルの開発について）
15. 天然物からの医薬品検索（ジギタリスについて）

【成績の評価】

レポート 80% 授業中の提出物 20% で評価します。

【自己学習】

興味のある人は図書館等で有機化学の本、生薬の本を読んで基礎知識を広げてください。

【履修上の注意】

第 1 週に出席の取り方などのガイダンスを合わせて行います。配布プリントは定期試験時に必要となりますので必ず保管をしてください。再配布はしません。

【テキスト】

毎回プリントを配布します。

【参考文献】

「資源天然物化学」（共立出版） 秋久俊博ら著
「読みもの 漢方生薬学」（不知火書房）木村孟淳
その他、講義中に紹介します。

【科目名】スポーツと健康

【担当教員】相澤 慎太

【研究室】診療・研究棟 3 階 313 研究室

【種 別】選択・前期 2 単位(講義)

【講義の目的】

現代社会の発達は、快適な生活を私たちに与えてくれている反面、オーバーストレスや運動不足を引き起こしている。本講義では、ストレスや運動不足が肥満や動脈硬化などの生活習慣病の原因になること、また日常生活や臨床の場で関わりの深い腰痛、高血圧、肥満などの成り立ちと運動との関わりについての知識を身につけることを目的とする。さらにスポーツはその実践方法によっては身体に悪影響を及ぼすことから、加齢とトレーナビリティ、スポーツ障害などを学び、基礎的な応急処置とその理論を習得する。

【到達目標】

健康・体力を管理する基本的な知識や方法を理解する。

【授業計画】

1. 健康とは何か？
2. 生活習慣病とは？
3. 体力とは何か？（体力テストについて）
4. 運動の仕組み①
5. 運動の仕組み②
6. トレーニング理論①（トレーニングの原理・原則）
7. トレーニング理論②（トレーニング計画）
8. トレーニング方法（レジスタンストレーニング）
9. 健康を維持・増進するための運動①
10. 健康を維持・増進するための運動②
11. ウォーミングアップ・クーリングダウン
12. 運動と水分補給
13. スポーツと心理
14. ストレスと疲労への対処法
15. まとめ

【成績の評価】

平常点 50% レポート・定期試験 50%

【自己学習】

健康に関する情報を収集する

【履修上の注意】

理論として理解することは大切なことであるが、それを普段の生活で実践するように心がける。
本科目は（財）日本体育協会公認アスレティックトレーナー共通科目に含まれていますので、遅刻・欠席には十分注意してください。

【テキスト】

【参考文献】

「公認スポーツ指導者養成テキスト共通科目Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」

（財団法人日本体育協会）

「健康・スポーツ科学講義」（杏林書院） 出村慎一他 著

【科目名】生涯スポーツⅠ

【担当教員】相澤 慎太・五十嵐 純

【研究室】診療・研究棟3階313研究室（相澤）

【種別】必修・前期1単位(実習)

【講義の目的】

慢性的な運動不足による体力の低下は身体にゆがみを引き起こし、様々な疾病の原因となることが知られている。生涯スポーツⅠではこれらの疾病の予防・改善に有効なスポーツ・運動を適時実践し、生活の中に意識的に運動を取り入れて行けるようにすることを目的とする。

【到達目標】

それぞれのスポーツの、意味を理解する、楽しめるようになる、生涯にわたって実践して行けるようになる。

【授業計画】

1. **【合同授業】**（相澤、渡辺）

ガイダンス 筆記用具を用意し、指定された教室に私服で集合。

2. 太極拳の実践（太極拳を実践し、その後選択種目を決定する）（第3週から「運動ゲーム」と「太極拳コース」に分かれて実践する。）

【運動ゲーム】（相澤）

3. ソフトボールの実践①
4. ソフトボールの実践②
5. ソフトボールの実践③
6. ソフトボールの実践④
7. ソフトボールの実践⑤
8. ソフトボールの実践⑥
9. 卓球の実践①
10. 卓球の実践②
11. 卓球の実践③
12. バドミントンの実践①
13. バドミントンの実践②
14. バドミントンの実践③
15. バドミントンの実践④

※ 天候により、授業内容を変更し体育館を使用することがある。

【成績の評価】

平常点 50% 学習到達度 30% 取り組み姿勢 20%

【自己学習】

予習はいらないが、復習として、動きの再確認を行うこと。

【履修上の注意】

- ・スポーツ用具は大切に扱う習慣をつけること。
- ・服装は動きやすい、授業にふさわしいものを着用すること。
- ・体育館内は土足厳禁のため、体育館専用のシューズを用意する。
- ・現金などの貴重品の取り扱いには十分注意し、各自で管理する。
- ・ピアス、ネックレス、指輪、腕時計等の貴金属品は他人及び自己の危険防止のため身につけない。
- ・遅刻は1回を1／3欠席として計算する。

【テキスト】

なし

【参考文献】

なし

【科目名】生涯スポーツⅡ**【担当教員】**相澤 慎太・五十嵐 純**【研究室】**診療・研究棟3階313研究室（相澤）**【種別】**選択・後期1単位(実習)**【講義の目的】**

筋力やバランス能力の低下が進むと行動が制限されるばかりでなく、転倒による骨折の可能性、ひいては歩行困難を来す可能性が高まってくる。生涯スポーツⅡでは、体力の維持、増進に有効である様々なトレーニング、体操およびスポーツの実践を通して、心身の良好な状態を維持する知識と技能を学ぶとともに、スポーツの楽しみ方を身につける。

【到達目標】

それぞれのスポーツの、意味を理解する、楽しめるようになる、生涯にわたって実践して行けるようになる。

【授業計画】1. **【合同授業】**（相澤、渡辺）

ガイダンス 筆記用具を用意し、指定された教室に私服で集合。
（第2週から選択する種目を決定する。）

【運動ゲームコース】（担当：相澤）

2. ソフトボールの実践①
3. ソフトボールの実践②
4. ソフトボールの実践③
5. ソフトボールの実践④
6. ソフトボールの実践⑤
7. ソフトボールの実践⑥
8. ソフトバレーボールの実践①
9. ソフトバレーボールの実践②
10. ソフトバレーボールの実践③
11. ソフトバレーボールの実践④
12. 卓球の実践①
13. 卓球の実践②
14. 卓球の実践③
15. 卓球の実践④

【成績の評価】

平常点 50% 学習到達度 30% 取り組み姿勢 20%

【自己学習】

予習はいらないが、復習として、動きの再確認を行うこと。

【履修上の注意】

- ・スポーツ用具は大切に扱う習慣をつけること。
- ・服装は動きやすい、授業にふさわしいものを着用すること。
- ・体育館内は土足厳禁のため、体育館専用のシューズを用意する。
- ・現金などの貴重品の取り扱いには十分注意し、各自で管理する。
- ・ピアス、ネックレス、指輪、腕時計等の貴金属品は他人及び自己の危険防止のため身につけない。
- ・遅刻は1回を1／3欠席として計算する。

【テキスト】

特になし

【参考文献】

特になし

【科目名】スポーツ社会学

【担当教員】中尾 哲也

【研究室】診療・研究棟 4 階 412 研究室

【種 別】選択・前期 1 単位（講義）

【講義の目的】

スポーツ社会への関わり方を考える基礎作りをする。

【到達目標】

様々なスポーツシーンから、今後のスポーツへの関わり方を考えられるようにする。

【授業計画】

1. スポーツの概要と歴史、文化としてのスポーツ
2. スポーツタレント発掘事業
3. 地域におけるスポーツ振興方策と行政のかかわり
4. 地域スポーツクラブの機能と役割
5. 地域における「スポーツ少年団」
6. 社会の中のスポーツ（スポーツプロモーション）
7. 日本スポーツ振興センター、
ナショナルトレーニングセンター
8. JOC 事業、国立スポーツ科学センター
9. 総合型地域スポーツクラブ
10. スポーツ組織の運営と事業
11. スポーツ財団
12. スポーツ指導者としてのあり方を考える
13. 我が国のスポーツ振興施策
14. 広域スポーツセンターの機能と役割
15. まとめ

【成績の評価】

毎回の授業（映像や講義内容）レポートにより評価します。
レポートには、その日に行われた授業内容のキーワードを出して頂きます。

【自己学習】

様々なスポーツに目を向けてみる

【履修上の注意】

提出するレポート用紙（ルーズリーフ可）を個人で準備する。

【テキスト】

「公認スポーツ指導者養成テキスト共通科目Ⅰ・Ⅱ」

日本体育協会

【参考文献】

【科目名】スポーツコーチング論

【担当教員】辻 和哉

【研究室】診療・研究棟 3 階 313 研究室

【種 別】選択・前期 1 単位（講義）

【講義の目的】

スポーツにおけるコーチングの基本を学ぶ

【到達目標】

スポーツにおけるコーチングの重要性を理解する

【授業計画】

1. スポーツ指導者とは
2. 指導者の心構え・視点
3. スポーツ指導者として必要なスキル・思考・行動
4. 競技者育成システム①
5. 競技者育成システム②
6. 競技者育成システム③
7. 良いプレイヤーとは
8. プレイヤーの自主性
9. ミーティングの必要性
10. モチベーション①
11. モチベーション②
12. 有望者発掘システム
13. 一貫指導システム
14. 各競技団体における競技者育成プログラム
15. まとめ

【成績の評価】

授業内のレポート及び試験

【自己学習】

事前にテキストを読んてくること

【履修上の注意】

本科目は（財）日本体育協会公認アスレティックトレーナー・スポーツプログラマー専門科目・JATI トレーニング指導者一般科目に認定されています。資格試験受験のために必要な科目になっています。

【テキスト】

「日本体育協会公認共通科目テキスト（Ⅰ・Ⅲ）」（日本体育協会）

【参考文献】

【科目名】アスレティックトレーナー概論Ⅰ**【担当教員】** 山口 由美子**【研究室】** 診療・研究棟4階415研究室**【種別】** 選択・前期1単位(講義)**【講義の目的】**

本講義時では、アスリートを取り巻くさまざまな環境のもとアスレティックトレーナーが知っておくべき諸問題の基礎をスポーツ現場の最新情報とともに学びます。生死に関わる現場に遭遇した場合、チームや遠征にアスレティックトレーナーとして帯同する場合に必要な医学知識を学ぶことが目的です。またグループワーク、相手への伝え方を工夫することを通じてプレゼンテーション能力・コミュニケーション能力の向上を目的に課題発表を行います。

【到達目標】

アスレティックトレーナーになるために必要とされる基礎知識の習得、スポーツ現場で対応できる一次救命処置を実施できる。グループワークやプレゼンテーションを通して、コミュニケーション能力の向上。

【授業計画】

1. 自己紹介 ・救急処置 (CRP/AED)①
2. 救急処置 (CRP/AED/RICE)②、アスリートの健康管理①
3. アスリートの健康管理 ②
4. アスリートの内科的障害と対策 ①
5. アスリートの内科的障害と対策 ②
6. アスリートの外傷・傷害と対策 ①
7. アスリートの外傷・傷害と対策 ② (課題の発表と検討1)
8. アスリートの外傷・傷害と対策 ③ (課題の発表と検討2)
9. アスレティックリハビリテーションとトレーニング計画①
10. アスレティックリハビリテーションとトレーニング計画②
11. スポーツによる精神障害と対策
12. 特殊環境下での対応
13. アンチドーピング
14. コンディショニングの手法① (ストレッチング、icing)
15. コンディショニングの手法② (テーピング、マッサージ)

【成績の評価】

学期末試験にて成績評価します。

【自己学習】

専門用語が多く出てきますので、事前に次回授業範囲に目を通しておいってください。

【履修上の注意】

はり灸・スポーツトレーナー学科、ヘルスプロモーション整備学科では資格試験受験のために必要な科目になっています。学科によって異なるので注意して下さい。

【テキスト】

「日本体育協会公認スポーツ指導者養成テキスト共通科目Ⅰ・Ⅲ」
※指定テキストはデザインが同じでも内容が変更になることがあるため、最新版を購入して受講すること。

【参考文献】

【科目名】アスレティックトレーナー概論Ⅱ**【担当教員】** 山口 由美子**【研究室】** 診療・研究棟 4 階 415 研究室**【種 別】** 選択・後期 1 単位(講義)**【講義の目的】**

本講義時では、アスレティックトレーナーとして必要なスポーツと心の関係やスポーツに関わる訴訟・法律を学びます。アスリートが効果的な技術習得を行う時、最高のパフォーマンスを発揮する時、モチベーションを高める時など様々な場面でアスレティックトレーナーにも心理学的な知識が必要とされます。また近年スポーツに関わる訴訟が注目されています。ここでは過去の判例をあげ法律に触れることでアスレティックトレーナーとしてリスク管理の必要性を再認識することが目的です。履修者はグループワーク、相手への伝え方を工夫することを通じてプレゼンテーション能力・コミュニケーション能力の向上を目的に課題発表を行います。

【到達目標】

アスレティックトレーナーになるために必要とされる基礎知識の習得、スポーツ指導者が知っておくべき法律理解。グループワークやプレゼンテーションを通して、コミュニケーション能力の向上。

【授業計画】

1. ガイダンス、スポーツと心
2. スポーツと心 ・スポーツにおける動機付け
3. コーチングの心理 (技能の練習と指導)
4. コーチングの心理 (プレーヤーの個人指導と心理的問題)
5. コーチングの心理 (チームの指導と心理的問題)
(コーチング評価)
6. メンタルマネジメントとは・リラクゼーション
7. イメージトレーニング
8. 集中力のトレーニング
9. 心理的コンディショニング
10. プレッシャー、あがり、スランプの克服
11. 指導者のメンタルマネジメント ①
12. 指導者のメンタルマネジメント ②
13. スポーツ事故におけるスポーツ指導者の法的責任①
14. スポーツ事故におけるスポーツ指導者の法的責任 ②
15. スポーツと人権・課題の発表と検討

【成績の評価】

学期末試験にて成績評価します。

【自己学習】

専門用語が多く出てきますので、事前に次回授業範囲に目を通しておいってください。

【履修上の注意】

はり灸・スポーツトレーナー学科、ヘルスプロモーション整復学科では資格試験受験のために必要な科目になっています。学科によって異なるので注意して下さい。

【テキスト】

「日本体育協会公認スポーツ指導者養成テキスト共通科目Ⅱ・Ⅲ」
(日本体育協会)

※指定テキストはデザインが同じでも内容が変更になることがあるため、最新版を購入して受講すること。

【参考文献】

【科 目 名】アスレティックトレーナーの役割

【担当教員】吉田 隆紀・増田 研一・辻 和哉・中尾 哲也・
山口 由美子・内田 靖之

【研 究 室】診療・研究棟 3 階 305 研究室（吉田）

【種 別】選択・前期 2 単位（講義）

【講義の目的】

スポーツの現場では様々な職種の人間が携わっているが、その中でも特にアスレティックトレーナーの役割について講義を行う。世界各国のアスレティックトレーナーの起源や歴史的背景、選手を取り巻くサポートスタッフとの連携、組織運営と管理、倫理規定などを学習することにより、アスレティックトレーナーが担うべき任務や役割・業務について理解を深めることを目的とする。

【到達目標】

アスレティックトレーナーの活動内容を理解し、見学実習や現場実習での自らの行動をイメージできるようになる。

【授業計画】

1. アスレティックトレーナーとは
2. スポーツ外傷・障害の予防
3. スポーツ現場における救急処置
4. アスレティックリハビリテーション
5. コンディショニング
6. 測定と評価
7. 健康管理と組織運営
8. 各スポーツ競技の特徴と AT①
9. 各スポーツ競技の特徴と AT②
10. 各スポーツ競技の特徴と AT③
11. 各スポーツ競技の特徴と AT④
12. 各スポーツ競技の特徴と AT⑤
13. 医科学スタッフとの連携・協力
14. コンディショニング 評価シートの作成
15. AT の倫理

【成績の評価】

定期試験の結果により評価する。

【自己学習】

授業の前には教科書を読んで専門用語の理解をしてから受講すること。

【履修上の注意】

【テキスト】

「日本体育協会公認テキスト① アスレティックトレーナーの役割」

【参考文献】

【科目名】英語表現法Ⅰ

【担当教員】佐々木 敏光

【研究室】

【種別】必修・前期2単位(講義)

【講義の目的】

比較的平易で、しかも今日的な内容の200～250語程度からなる英文記事を読むことを通して、国際的なものの見方、考え方を身につける。

【到達目標】

- ①英文記事のスタイルに慣れる。
- ②英文記事のヘッドライン、写真から内容を推測する。
- ③英文記事の背景を理解する。
- ④英文記事の構文を確認しながら、本文の内容を読み取る。

【授業計画】

1. Introduction:授業の進め方、英字新聞のスタイルについて
2. Unit 1 電流を流した金属で復活するサンゴ礁—インドネシア発
3. Unit 2 食糧難を救うじゃがいも—ペルー発
4. Unit 3 オフィスに氷の塊を置いて夏の省エネ—アメリカ発
5. Unit 4 運動がアルツハイマー予防に効果—イギリス発
6. Unit 5 サハラ砂漠を緑化して、増える人口に土地を確保—エジプト発
7. Unit 6 テスト勉強中のストレス、叫んで解消—アメリカ発
8. Unit 7 ダム建設が農民の生活を奪う—インド発
9. Unit 8 世界的な禁煙傾向、タバコ産業の将来は—キューバ発
10. Unit 9 溶ける氷河におびやかされる人々の生活—ボリビア発
11. Unit 10 アボリジニの命の綱、伝統的な薬草医療—オーストラリア発
12. Unit 11 温暖化で干ばつ続き⇒早い強い作物に栽培転換—ザンビア発
13. Unit 12 フルーツカクテルで健康に？ アルコールで抗酸化作用の効果アップか—アメリカ発
14. Unit 13 住民を国外へ追いやる海面上昇—モルディブ発
15. 期末考査

【成績の評価】

定期考査 50%、復習テスト 30%、レポート 10%、平常点 10%で評価します。

【自己学習】

最初は辞書を使わないで本文を読み、大意を読み取る努力をしてください。次に、意味の分からない語句は辞書で調べ、最後にもう一度本文を読んで内容を理解することを目指してください。

【履修上の注意】

- ①毎回、前回の授業内容を範囲とした復習テストを実施します。
- ②授業に辞書を持ってきてください。

【テキスト】

「Healing Our World Today's Health and Environment News 世界の環境と健康ニュースを読む」 (南雲堂) 小笠原 真司、ピノ・カトローニ編

【参考文献】

講義の中で紹介します。

【科 目 名】英語表現法 I

【担当教員】吉田 仁志

【研 究 室】5 号館 7 階 C720 研究室

【種 別】必修・前期 2 単位（講義）

【講義の目的】

日常生活の様々な話題について英文を読んだり、英語で発信できるようにすること。

【到達目標】

発音・語彙・文法などの演習を通して、英語という言語の特質を理解すること。

【授業計画】

1. はじめに
2. 名詞・冠詞
3. 代名詞
4. 基本時制
5. 進行形
6. 完了形
7. 助動詞
8. 受動態
9. 不定詞
10. 分詞
11. 動名詞
12. 前置詞
13. 関係詞
14. 仮定法
15. まとめ

【成績の評価】

定期試験 7 0 %、平常点 3 0 %で評価します。

【自己学習】

予習して知らない単語を辞書で調べておいてください。

【履修上の注意】

（電子）辞書を持ってくるください。

【テキスト】

「読解力をみがく基本英文法」（朝日出版社）

福井・北山・山中（共著） ISBN978-4-255-15560-9

【参考文献】

【科目名】英語表現法Ⅱ

【担当教員】MONICA RANKIN

【研究室】

【種別】必修・後期２単位（講義）

【講義の目的】

Review oral English skills

【到達目標】

Vocabulary*Reading*Speaking* Listening

【授業計画】

1. Class Explanation
2. Self Introductions
3. Likes and Dislikes
4. Money and Prices
5. Your Family
6. Vocabulary Quiz
7. Explain Presentations
8. Letter Writing no 1
9. Simple Past
10. Your Future Job
11. Your Daily Routine
12. Places and Location
13. Presentations
14. Final Review
15. Final exam

【成績の評価】

Vocabulary Quizzes 15%

In-class Participation 30%

Reading 20%

Listening 10%

Final Exam 25%

【自己学習】

A4 Clear File 32 pockets

English-Japanese Dictionary

【履修上の注意】

Speaking and Listening in class is required.

Use English in the classroom.

【テキスト】

「Communication Spotlight Speaking Strategies and Listening

Skills-Starter」(ABAX 発行) Alastair Graham-Marr 著

【参考文献】

【科 目 名】英語表現法Ⅱ

【担当教員】亀 節子

【研 究 室】管理棟 2 階 204 研究室

【種 別】必修・後期 2 単位（講義）

【講義の目的】

本講義の目的は、英語を習得する過程そのものの面白さを発見しながら、総合的な英語力を培うことです。

【到達目標】

目からの英語、耳からの英語に対する積極的な感受性を養う訓練を通して、何事にも好奇心旺盛な姿勢を身につけること。

【授業計画】

1. UNIT1 《The Mystery of Dreams：前半部》
2. UNIT1 《The Mystery of Dreams：後半部》
3. UNIT1 《Review&Practice》
4. UNIT9 《Dieting：前半部》
5. UNIT9 《Dieting：後半部》
6. UNIT9 《Review&Practice》
7. UNIT15 《Volcanoes：前半部》
8. UNIT15 《Volcanoes：後半部》
9. UNIT15 《Review&Practice》
10. UNIT16 《Seedless Fruit：前半部》
11. UNIT16 《Seedless Fruit：後半部》
12. UNIT16 《Review&Practice》
13. 《Ms. Scrooge：新クリスマスキャロル》の鑑賞
14. UNIT21 《Building Healthier Houses：前半部》
15. UNIT21 《Building Healthier Houses：後半部》

【成績の評価】

定期試験での成績、受講態度などの平常点、この両者にて評価を行います(試験 7 0 %・平常点 3 0 %)。二名の教員によって担当しますので、最終評価は、その総合点の平均となります。

【自己学習】

予めテキストに目を通して単語の確認を済ませておけば学習効果が増します。

【履修上の注意】

英和辞書の持参が望ましい。

【テキスト】

” Our Sacred Health and Environment ” （成美堂）

【参考文献】

講義の中で紹介します。

【科目名】国語表現法

【担当教員】南山 かおり

【研究室】

【種別】必修・前期2単位(講義)

【講義の目的】

この講義は、コミュニケーション手段の一つとしての「文章表現」について論じる。

文章による伝達は、今や現代社会において、大きな比重を占めるようになってきた。私たちは、日常生活の様々な場面で、日本語によって文章を綴ることを避けることはできない。それは、医療の現場においても、また同じである。カルテや紹介状の作成等、現場では常に正確で明瞭な文書の作成を要求されるだろう。

よって、講義の中では、自らの意図するところを的確に表現し、よりよい文章を書くためには何が必要か、身近な事例を通して考えてゆくことにする。

【到達目標】

的確な言語表現を実現するため、まずは、その表現媒体である「日本語」についての知識を深め、興味を喚起することを第一の目標とする。

さらにその上で、本当によい文章とは何か、正確に伝えるには何が必要か、について、自身の基準を持てるようになること、それが第二の目標である。

このことによって、実際の表現の場においても、常に慎重に自らの日本語を見つめ、よりよい文章を書く能力が身につくものと考えてる。

【授業計画】

1. ガイダンス ― 授業の概要と成績評価について
2. I. ことばに敏感になる ― 1. 語感をつかむ
3. I. ことばに敏感になる ― 2. 「思う」と「考える」
4. I. ことばに敏感になる ― 3. 「ある」と「いる」
5. I. ことばに敏感になる ― 4. 語源を意識する
6. I. ことばに敏感になる ― 5. 派生語に注目する
7. I. ことばに敏感になる ― 6. 漢字と漢語
8. I. ことばに敏感になる ― 7. 漢語の特徴
9. II. 文の構造を考える ― 1. 「ハ」と「ガ」はどう違うか
10. II. 文の構造を考える ― 2. 「ハ」の働き
11. II. 文の構造を考える ― 3. 「ガ」の働き
12. II. 文の構造を考える ― 4. 「ハ」の文、「ガ」の文
13. III. ことばは変化する ― 1. ことばの揺れを観察する
14. III. ことばは変化する ― 2. 「ら抜きことば」の問題
15. III. ことばは変化する ― 3. 情報の使い方

【成績の評価】

レポート提出 50%・レポート内容 40%・平常点 10%

【自己学習】

講義中に紹介した参考図書や、その他の日本語に関する本を読む等して、平生から「日本語に対する興味・理解を深める」ことを心がける。

【履修上の注意】

課題のレポートは必ず提出すること。未提出の場合は単位を認定できない。

また、不必要な私語や途中退席等、授業の妨げになる行為は慎むこと。指示を守れない者は出席を認めないので注意すること。

【テキスト】

毎回、授業時にプリントを配布。

【参考文献】

「日本語練習帳」 (岩波新書) 大野晋 著

「日本語はおもしろい」 (岩波新書) 柴田武 著

「日本語はなぜ変化するか」 (笠間書院) 小松英雄 著

【科 目 名】人体の構造 I

【担当教員】深澤 洋滋

【研 究 室】診療・研究棟 4 階 404 研究室

【種 別】必修・前期 2 単位（講義）

【講義の目的】

医学の最も基礎を構成する科目の一つが「人体の構造」です。人体の各部分の構造はその与えられた機能を円滑かつ効率的に行うため、驚くべき進化を遂げています。「人体の構造 I」では骨学・筋学に焦点をあて、人体の正常な運動器系の構造を熟知し、構造と機能の関連を理解することを目的とします。

【到達目標】

骨学・筋学の基本的な知識を学習し、これらにより構成される運動器系について臨床応用可能な知識を習得します。そのため、3 次元的な知識の構築のため、講義の進行に合わせ、一部の時間に人体骨標本や筋模型標本を用いた実習を行います。

【授業計画】

1. 人体の構成
2. 骨の構成・頭蓋骨
3. 頭蓋骨・脊柱を構成する骨
4. 骨学実習（頭蓋）
5. 胸郭を構成する骨・上肢の骨
6. 上肢の関節・下肢の骨
7. 骨学実習（上肢の骨）
8. 下肢の関節・骨盤・頭部の筋
9. 頸部の筋・背部の筋
10. 骨学実習（下肢の骨）
11. 胸部の筋・腹部の筋・上肢帯の筋
12. 上腕の筋・前腕の筋
13. 筋学実習（体幹の筋）
14. 手の筋・骨盤筋
15. 大腿の筋・下腿の筋・足の筋

【成績の評価】

試験は小テスト、中間試験と学期末試験を実施します。それらの試験結果（追再試験結果を含む）を判定材料として重視し、総合評価を行います。

【自己学習】

指定テキストである「グレイ解剖学」を講義前に読み、講義内容についての予習を行うこと。

【履修上の注意】

・必須科目のため、毎回の授業で出席確認を行います。
・遅刻は 3 回累積で欠席 1 回とみなします。
・各講義では講義内容についての B4 サイズのプリントを配付します。（全 90 枚）学習資料としてクリアファイルなどに整理して下さい。

【テキスト】

「プリント配付」（90 枚）

「グレイ解剖学」（エルゼビア・ジャパン）

「プロメテウス解剖学コアアトラス」（医学書院）

【参考文献】

「人体解剖カラーアトラス 原著第 5 版」（南江堂）

ピーター・ハーバート・エーブラハム著

【科 目 名】人体の構造Ⅱ

【担当教員】深澤 洋滋

【研 究 室】診療・研究棟 4 階 404 研究室

【種 別】必修・後期 1 単位（講義）

【講義の目的】

「人体の構造Ⅰ」に続き人体の正常な構造を熟知するため、人体を構成する系統のうち消化器系・呼吸器系・泌尿器系・生殖器系・内分泌系・循環器系・神経系・感覚器系について講義を行います。

【到達目標】

系統解剖学により得た知識を融合させ局所解剖学的知識に発展させることを目標とします。また、組織学の基本知識を身につけることにより、マクロだけでなくミクロレベルからも構造と機能の関係を深く理解出来るよう、講義の進行に合わせ、主要臓器組織標本の光学顕微鏡による観察を行う組織学実習を平行して実施します。

【授業計画】

1. 内臓学総論・消化器系（口腔・胃）
2. 消化器系（小腸・大腸・肝臓・膵臓）
3. 呼吸器系
4. 泌尿器系
5. 生殖器系
6. 内分泌系
7. 循環器系（心臓・動脈）
8. 循環器系（静脈・リンパ・胎児循環）
9. 神経系（概論・中枢神経系）
10. 神経系（中枢神経系）
11. 神経系（中枢神経系）
12. 神経系（末梢神経系）
13. 神経系（末梢神経系）
14. 神経系（伝導路）
15. 神経系（感覚器）

【成績の評価】

試験は中間試験と学期末試験を実施します。それらの試験結果（追再試験結果を含む）を判定材料として重視し、総合評価を行います。

【自己学習】

指定テキストである「グレイ解剖学」を講義前に読み、講義内容についての予習を行うこと。

【履修上の注意】

- ・必須科目のため、毎回の授業で出席確認を行います。
- ・遅刻は 3 回累積で欠席 1 回とみなします。
- ・各講義では講義内容についての B4 サイズのプリントを配付します。（全 111 枚）学習資料としてクリアファイルなどに整理して下さい。

【テキスト】

「プリント配付」（111 枚）

「グレイ解剖学」（エルゼビア・ジャパン）

「プロメテウス解剖学コアアトラス」（医学書院）

【参考文献】

人体解剖カラーアトラス 原著第 5 版」（南江堂）

ピーター・ハーバート・エーブラハム著

【科目名】人体の構造実習

【担当教員】深澤 洋滋

【研究室】診療・研究棟 4 階 404 研究室

【種 別】必修・後期 1 単位（実習）

【講義の目的】

「人体の構造Ⅰ」で学習した骨学や筋学の知識に立体的な理解を加えるため、人体骨標本や筋膜型標本を教材に用いた観察とワークシートの課題に沿った実習作業を行います。また、「人体の構造Ⅱ」に関しては、講義内容の進行に平行して主要な臓器標本の光学顕微鏡観察を実施します。この科目は本来実習科目としての位置づけですが、講義の進行に合わせ一部の時間に講義を行います。

【到達目標】

人体を構成する各器官系について局所解剖学的に理解を深めることを目標とします。また、マクロ的な理解に留まらず、それらを構成する細胞や組織のミクロレベルでの特徴的な構造を各々の臓器機能と関連付けて理解を深めます。

【授業計画】

1. 骨学実習（頭蓋骨）
2. 骨学実習（体幹の骨）
3. 骨学実習（上肢の骨）
4. 骨学実習（下肢の骨）
5. 筋学実習（頭頸部の筋）
6. 筋学実習（体幹の筋）
7. 筋学実習（上肢の筋）
8. 筋学実習（下肢の筋）
9. 顕微鏡実習（基本操作の習得）
10. 顕微鏡実習（消化器系）
11. 顕微鏡実習（呼吸器系）
12. 顕微鏡実習（泌尿器系）
13. 顕微鏡実習（生殖器系）
14. 顕微鏡実習（内分泌系）
15. 顕微鏡実習（神経系）

【成績の評価】

試験は定期試験の期間内に実施します。試験結果（追再試験を含む）と実習作業の内容および提出物（骨学実習 Worksheet、筋学実習 Worksheet、組織学実習 Worksheet）を判定材料として重視し、総合評価を行います。

【自己学習】

【履修上の注意】

- ・必須科目のため、毎回の授業で出席確認を行います。
- ・遅刻は 3 回累積で欠席 1 回とみなします。

【テキスト】

骨学実習 Worksheet、筋学実習 Worksheet、組織学実習 Worksheet を配付します。

【参考文献】

【科目名】人体の機能Ⅰ

【担当教員】樫葉 均

【研究室】管理棟 2 階 206 研究室

【種 別】必修・前期 2 単位（講義）

【講義の目的】

生理学（Physiology）は万人に共通する身体の仕組みについて探求する学問です。この学問は基礎医学の中で特に重要な科目の一つで、あらゆる西洋医学のベースとなる領域です。理学療法士においてもその重要性にかわりはありません。一般に生理学は、動物性機能と植物性機能に大別することができますが、「人体の機能Ⅰ」では、神経系・運動器系・感覚器系を中心とする動物性機能について学習します。

【到達目標】

以下に記したテキストに記載されている人体の機能の仕組みについて理解することを目標にして下さい。

【授業計画】

1. 生理学一般
 2. 神経（神経の一般的性質、変性と再生）
 3. 神経（静止膜電位、活動電位）
 4. 神経（興奮の伝導と伝達）
 5. 神経（末梢神経系）
 6. 神経（中枢神経系）
 7. 神経（自律神経系）
 8. 筋（筋収縮の仕組みとその分類）
 9. 筋（骨格筋、心筋、平滑筋）
 10. 筋（筋のエネルギー代謝）
 11. 運動（骨格筋に神経支配）
 12. 運動（下行路、運動の調節）
 13. 感覚（感覚の仕組みと一般的性質）
 14. 感覚（皮膚感覚と内臓感覚）
 15. 感覚（特殊感覚）
- （1~15 までの各項目につき、各 4 時間毎の講義を行う）

【成績の評価】

試験 100%にて評価します。ただし、授業の 1／3 を超えて欠席した者は受験する資格がありません。

【自己学習】

事前にテキストを十分に読み込んで、理解できない個所を抽出しておくことが重要です。

【履修上の注意】

1 年生のうちに専門科目の基礎となる生理学の知識を十分に身につけておいて下さい。

【テキスト】

「生理学 第 3 版」 東洋療法学校協会編 （医歯薬出版）

【参考文献】

適宜、講義中に紹介します。

【科目名】人体の機能Ⅱ

【担当教員】樫葉 均

【研究室】管理棟 2 階 206 研究室

【種 別】必修・後期 1 単位（講義）

【講義の目的】

生理学（Physiology）は万人に共通する身体の仕組みについて探求する学問です。この学問は基礎医学の中で特に重要な科目の一つで、あらゆる西洋医学のベースとなる領域です。理学療法士においてもその重要性にかわりはありません。一般に生理学は、動物性機能と植物性機能に大別することができます。「人体の機能Ⅱ」では植物性機能、つまり、循環器系、呼吸器系、消化器系、排泄器系、生殖器系、内分泌系の機能について学習します。

【到達目標】

以下に記したテキストに記載されている人体の機能の仕組みについて理解することを到達目標にして下さい。

【授業計画】

1. 血液（血液の組成、血球の働き）
 2. 血液（血液凝固、血液型）
 3. 循環（循環中枢、心臓の働き）
 4. 循環（循環の調節、血圧）
 5. 呼吸（呼吸運動とその調節）
 6. 呼吸（ガス交換とガス運搬）
 7. 消化と吸収（消化器系と消化酵素）
 8. 消化と吸収（消化管ホルモン、肝臓の働き）
 9. 栄養と代謝（三大栄養素、同化と異化）
 10. 体温（産熱、発熱、体温調節の仕組み）
 11. 排泄（尿の生成）
 12. 排泄（体液の調節、排尿と蓄尿）
 13. 内分泌（ホルモンの性質）
 14. 内分泌（内分泌腺の働き）
 15. 生殖（生殖器機能、性ホルモン）
- （1~15 までの各項目につき、各 2 時間毎の講義を行う）

【成績の評価】

試験 100%にて評価します。ただし、授業の 1／3 を超えて欠席した者は受験する資格がありません。

【自己学習】

事前にテキストを十分に読み込んで、理解できない個所を抽出しておくことが重要です。

【履修上の注意】

1 年生のうちに専門科目の基礎となる生理学の知識を十分に身につけておいて下さい。

【テキスト】

「生理学 第 3 版」 東洋療法学校協会編 （医歯薬出版）

【参考文献】

適宜、講義中に紹介します。

【科目名】人体の機能実習

【担当教員】樫葉 均・大島 稔

【研究室】管理棟 2 階 206 研究室（樫葉）
診療・研究棟 4 階 404 研究室（大島）

【種 別】必修・後期 1 単位（実習）

【講義の目的】

「人体の機能Ⅰ・Ⅱ」で学習した内容をさらに深く理解するため、幾つかの生理学の項目について実習講義と実習を行います。実習の項目は以下の通りです。①生理学実習装置の理解とその操作方法 ②心電図の測定と三角図法 ③皮膚感覚：感覚点と二点弁別閾 ④血液型の判定とヘマトクリット値 ⑤呼吸運動と肺気量分画 ⑥カエルの神経と筋

【到達目標】

「人体の機能実習」を行うことで、「人体の機能Ⅰ・Ⅱ」で学習した内容をさらに深く理解し、自分の知識として確立させることを到達目標として下さい。

【授業計画】

1. 実習講義 ①生理学実習装置の理解
 2. 実習 ①生理学実習装置の理解
 3. 実習講義 ②心電図の測定と三角図法
 4. 実習 ②心電図の測定と三角図法
 5. 実習講義 ③皮膚感覚：感覚点と二点弁別閾
 6. 実習 ③皮膚感覚：感覚点と二点弁別閾
 7. 実習講義 ④血液型の判定とヘマトクリット値
 8. 実習 ④血液型の判定とヘマトクリット値
 9. 実習講義 ⑤呼吸運動と肺気量分画
 10. 実習 ⑤呼吸運動と肺気量分画
 11. 実習講義 ⑥カエルの神経と筋
 12. 実習 ⑥カエルの神経と筋
 13. 実習テスト
 - 14.
 - 15.
- （1~12 までの各項目につき、各 4 時間毎の実習講義および実習を行う）

【成績の評価】

実習への取り組み方とレポート 60 点、実習テスト 40 点にて評価します。

【自己学習】

事前に実習に関わる項目を教科書を参考に学習しておくことが重要です。

【履修上の注意】

「人体の機能実習」は実習科目なので、真剣に実習に取り組む姿勢が大事です。実習終了後はレポートを作成しながら、知識を整理する作業を怠らないように心掛けて下さい。

【テキスト】

実習中に配布します。

【参考文献】

「生理学 第 3 版」 東洋療法学校協会編 （医歯薬出版）

【科 目 名】基礎運動学 I

【担当教員】谷 埜 予士次

【研 究 室】診療・研究棟 3 階 308 研究室

【種 別】必修・後期 1 単位（講義）

【講義の目的】

理学療法士の目的は、障がいを持つ方々の基本動作能力を改善させることである。したがって、理学療法士は動作を構成する身体運動の仕組みについて理解しておく必要がある。本講義では主に骨・関節の構造と機能、筋の作用を理解する。

【到達目標】

解剖学および生理学で習得した知識から、身体運動を理解できるようにすることを目標とする。

【授業計画】

1. 運動とは
2. 関節の構造と種類
3. 筋収縮の機序
4. 筋収縮の様態
5. 肩関節複合体の運動①
6. 肩関節複合体の運動②
7. 肩関節複合体の運動③
8. 肘関節・前腕の運動①
9. 肘関節・前腕の運動②
10. 手関節・手指の運動①
11. 手関節・手指の運動②
12. 手関節・手指の運動③
13. 股関節の運動①
14. 股関節の運動②
15. 股関節の運動③

【成績の評価】

試験 90%・平常点 10%にて総合的に評価する。

【自己学習】

「人体の構造 I」・「人体の機能 I」の復習をしておいてください。

【履修上の注意】

実技も行いますので、その際は動きやすい服装を用意してください。

【テキスト】

「基礎運動学 第 6 版」 （医歯薬出版） 中村隆一・他

【参考文献】

「日本人体解剖学 上巻」 （南山堂） 金子丑之助

「筋骨格系のキネシオロジー 原著第 2 版」 （医歯薬出版）

嶋田智明・他監訳

【科目名】医学概論

【担当教員】近藤 哲哉

【研究室】診療・研究棟 3 階 303 研究室

【種 別】必修・前期 2 単位（講義）

【講義の目的】

医学史及び現代における医療問題を理解する。

【到達目標】

医学、医療に歴史、問題点や意義について自分なりの考え方をもち、問題意識をもって医療に携われるようになる。

【授業計画】

1. 西洋医学史（1）古代から近世
2. 西洋医学史（2）19 世紀から現代
3. 東洋医学史（1）中国医学史
4. 東洋医学史（2）日本医学史
5. 最先端医学
6. 電磁気と医学
7. 戦争と医療
8. 宗教と医療
9. 生殖医療
10. 難病の延命治療、終末器医療
11. 臓器移植
12. パターナリズムとインフォームドコンセント
13. 胃瘻と人工呼吸器
14. 補完代替医療
15. 人口問題と医療

【成績の評価】

4 択のマークシート問題の期末試験の点数のみで評価します。
6 割以上正答すれば合格です。追再試験も同様です。

【自己学習】

講義の進行が遅いと感じる人は、プリントの表の下にある注釈を読んでください。通学の電車内の時間も有効に使いましょう。

【履修上の注意】

プリントの、スクリーンに映っている部分よりも上下左右が見たい場合は、その方向を指差すジェスチャーで教えてください。画面をスクロールします。

【テキスト】

特になし。

【参考文献】

講義中に適宜紹介します。

【科目名】臨床心理学概論

【担当教員】伊東 弘美

【研究室】

【種別】必修・前期1単位(講義)

【講義の目的】

対人援助職の基本となる臨床心理学的対人理解と受容的態度について学ぶ。

【到達目標】

臨床場面における患者―治療者関係を念頭に、理論よりも自己への気づきや他者理解に重点を置く。

【授業計画】

1. オリエンテーション：対人援助職とは
2. 心理的適応・不適応のメカニズム (1) 葛藤仮説
3. 心理的適応・不適応のメカニズム (2) 精神分析理論
4. 心理的適応・不適応のメカニズム (3) 防衛機制
5. コミュニケーションの定義・分類
6. 対人援助職のコミュニケーションスキル
7. コミュニケーションの障害と病理
8. 対人関係における知識・理解
9. 対人関係における共感的理解
10. 心理検査法
11. 心理検査実習
12. 無意識とコンプレックス
13. 心理療法
14. 患者役割行動の心理と治療者
15. まとめ

【成績の評価】

レポートにて評価する。定期試験は行わない。

【自己学習】

“自分なら”の視点をもって受講することを期待します。

【履修上の注意】

毎回配布する出席票に感想、質問を記入し提出。
心理検査のほかにも3～4回の実習を含む。

【テキスト】

プリント配布

【参考文献】

「ナースのための心理学」 (金子書房) 岡堂哲夫編

「心とかかわる臨床心理」 (ナカニシヤ出版)

川瀬正裕・松本真理子・松本英夫 著

【科目名】リハビリテーション概論**【担当教員】** 鈴木 俊明**【研究室】** 診療・研究棟 3 階 307 研究室**【種 別】** 必修・前期 1 単位(講義)**【講義の目的】**

リハビリテーションの定義、歴史、理念および障害の分類について講義する。障害の分類では、現在の国際生活機能分類だけでなく、理学療法評価での問題点の捉え方として用いられている国際障害分類についても詳細に講義する。また、リハビリテーションチームの役割と、医療機関で行われている医学的リハビリテーションの具体的方法と、社会や地域を含めた包括的なリハビリテーションの概念と具体的方法も講義する。また、医療・福祉・保健領域におけるチーム医療の重要性と関連職種の業務内容についても解説し、理学療法士の役割を明確に理解させる。

【到達目標】

リハビリテーションの概要を把握し、理学療法士の役割を理解する。

【授業計画】

1. リハビリテーションの定義、歴史、理念
2. リハビリテーション医学について
3. 障害とは 国際障害分類と国際生活機能分類
4. リハビリテーションの分野
5. リハビリテーションチームの重要性
6. リハビリテーション職種の役割：医師・看護師・保健師
7. リハビリテーション職種の役割：理学療法士・作業療法士・言語聴覚士
8. リハビリテーション職種の役割：義肢装具士・社会福祉士・介護福祉士・ケアマネジャー
9. 医学的リハビリテーション
10. 社会的リハビリテーション
11. 職業的リハビリテーション
12. 教育的リハビリテーション
13. リハビリテーションでよく見られる症状：廃用症候群・褥瘡・関節可動域制限
14. リハビリテーションでよく見られる症状：痙縮・浮腫・疼痛
15. まとめ

【成績の評価】

定期試験 90%、平常点 10%で評価する。

【自己学習】

特に準備はありませんが、1 回の授業で十分に授業内容を把握するように努力すること。

【履修上の注意】

リハビリテーションの全体を把握するために重要な科目である。本講義を通して、リハビリテーションを実施するには多くの職種の協力が必要であること、様々な場面でリハビリテーションが必要であることを理解してほしい。

【テキスト】

「医療・保健・福祉におけるリハビリテーション」

関西医療大学保健医療学部 理学療法学科 編

「臨床理学療法評価法」 (アイベック) 鈴木俊明 監修

【参考文献】

「入門 リハビリテーション概論 第 6 版」 (医歯薬出版)

中村隆一 編

【科 目 名】保健医療福祉概論

【担当教員】米田 浩久

【研 究 室】診療・研究棟 3 階 305 研究室

【種 別 】必修・後期 1 単位（講義）

【講義の目的】

理学療法士は病院などの医療施設だけでなく、介護老人保健施設・特別養護老人ホームなどの福祉施設、保健所・保健センターなどの保健施設のように大変広い分野で活躍している。本科目では、医療・福祉・保健の各制度の歴史的背景やその具体的な内容を講義する。医療・福祉・保健の各領域における関連性を理解することで、理学療法士が患者へ適切なサービスが提供できることを視野に入れて出来るだけ具体的に解説する。

【到達目標】

本教科では、理学療法を取り巻く環境への理解を十分に深め、実際に用いることのできる知識として習得することを目的とする。

【授業計画】

1. 社会保障概論
2. 医療保険について
3. リハビリテーションに関する診療報酬（報酬体系）
4. 疾患別リハビリテーション
5. 消炎鎮痛等処置・回復期リハビリテーション病棟入院料
6. 介護保険について
7. リハビリテーションと介護保険（予防給付）
8. リハビリテーションと介護保険（介護給付）
9. 介護保険法務・事務（法定実施項目および罰則規定等）
10. 訪問リハビリテーション
11. 福祉分野（健康増進推進事業（転倒予防）など）
12. 障害者認定の仕組みと事務手続き
13. 義肢装具の給付体系と申請方法
14. リハビリテーションと社会福祉制度
15. 社会福祉関連諸施策（国際的観点から）

【成績の評価】

試験 70%、平常点 30%

【自己学習】

毎回の講義内容の復習を欠かさずおこなうこと。また、配布するプリントは必ずファイリングし、来る実習や国家試験対策用の資料として保管すること。

【履修上の注意】

国家試験領域の科目であるため、予習復習を必ず行い、体系的に理解できるように努めること。

【テキスト】

毎回の講義でプリントを配布する。

【参考文献】

「地域理学療法学ノート 第 1 版」 （アイペック）

理学療法科学学会 監修

「医療福祉総合ガイドブック」 （医学書院）

日本医療ソーシャルワーク研究会著

【科 目 名】理学療法概論**【担当教員】**鈴木 俊明・文野 住文**【研 究 室】**診療・研究棟 3 階 307 研究室(鈴木)
3 号館 3 階 PT 教員室(文野)**【種 別】**必修・前期 1 単位(講義)**【講義の目的】**

本科目では、理学療法学とはどういったものかについて、その導入部分を教授する。内容として、理学療法の目的、歴史的背景、および具体的な理学療法としての運動療法や物理療法の役割について教授する。また、本科目を通して、理学療法の全体像を理解させるだけでなく、理学療法評価によって導きだされた問題点に対する運動療法や物理療法の適応とその具体的な方法を理解することを目的とする。

【到達目標】

理学療法の目的、評価方法、具体的な理学療法の方法を理解する。

【授業計画】

1. 理学療法の目的、歴史的背景
2. 理学療法評価：トップダウン評価とボトムアップ評価
3. 理学療法評価：情報収集、問診、能力障害の把握と基本動作の選択
4. 理学療法評価：動作観察と動作分析
5. 理学療法評価：理学療法検査
6. 理学療法評価：問題点の抽出、関連図の作成、目標設定
7. 理学療法総論：運動療法と物理療法
8. 運動療法：関節可動域改善のための運動療法 1
9. 運動療法：関節可動域改善のための運動療法 2
10. 運動療法：筋力強化のための運動療法 1
11. 運動療法：筋力強化のための運動療法 2
12. 運動療法：日常生活動作改善のための運動療法 1
13. 運動療法：日常生活動作改善のための運動療法 2
14. 物理療法 1
15. 物理療法 2

【成績の評価】

定期試験 90%、平常点 10%で評価する。

【自己学習】

授業後の復習をおこなうこと。

【履修上の注意】

「理学療法とは」を理解できる大切な科目である。本講義を通して、理学療法の流れを大まかに理解することを目的にする。講義中心の科目であるが、講義内容の理解を深めるために、講義のなかで実際の理学療法について紹介する予定である。

【テキスト】

「臨床理学療法評価法」 (アイベック) 鈴木俊明 監修

「運動器疾患の評価と理学療法」 (アイベック)

鈴木俊明 監修

【参考文献】

「理学療法テキストⅠ 理学療法概論」 (神陵文庫)

千住秀明 監修

【科 目 名】運動療法概論 I

【担当教員】 谷 埜 予士次

【研 究 室】 診療・研究棟 3 階 308 研究室

【種 別 】 必修・後期 1 単位（講義）

【講義の目的】

運動療法とは、治療の一手段として運動を用いることであり、理学療法の主要な部分を占める。本講義では運動療法を理解すべく、定義、歴史、運動の必要性と効果を紹介する。これらをふまえた上で、どのような運動療法があるかを理解する。

【到達目標】

機能障害に応じた運動療法を理解し、運動をすることによって身体にはどのような効果が得られるかを理解する。

【授業計画】

1. 運動療法とは
2. 運動の必要性と効果
3. 運動とエネルギー代謝①
4. 運動とエネルギー代謝②
5. 運動とエネルギー代謝③
6. 運動と呼吸・循環器系①
7. 運動と呼吸・循環器系②
8. 随意運動と不随意運動①
9. 随意運動と不随意運動②
10. 広義の運動療法
11. 狭義の運動療法
12. 関節可動域練習
13. 筋力強化練習
14. 感覚と運動
15. 運動学習を目的とした動作練習

【成績の評価】

試験 90%・平常点 10%にて総合的に評価する。

【自己学習】

「人体の構造 I」・「人体の機能 I」の復習をしておいてください。

【履修上の注意】

実技も行うため、その際は動きやすい服装を準備すること。

【テキスト】

「運動器疾患の評価と理学療法」 （アイペック）

鈴木俊明 監修

「基礎運動学 第 6 版」 （医歯薬出版） 中村隆一・他

【参考文献】

「運動療法学テキスト」 （南江堂） 細田多穂 監修

【科 目 名】感染管理学

【担当教員】高木 綾一・光田 尚代・加藤 祥子

【研 究 室】

【種 別】必修・後期 1 単位(講義)

【講義の目的】

感染症の概要を把握し、理学療法における感染防止についての知識を習得する。

【到達目標】

感染防止を理解、実行できる。

【授業計画】

1. 感染症とは
2. 理学療法と感染症 I
3. 理学療法と感染症 II
4. 感染経路
5. 消毒と滅菌・感染防止策
6. 感染症と理学療法事例
7. 感染症と理学療法事例
8. 試 験

【成績の評価】

筆記試験にて行う。

【自己学習】

特になし。

【履修上の注意】

出席すること、ノートをきちんととること。

【テキスト】

特に指定しない。

【参考文献】

特に指定しない。

【科 目 名】安全管理学

【担当教員】高木 綾一・光田 尚代・井尻 朋人

【研 究 室】

【種 別】必修・後期 1 単位（講義）

【講義の目的】

リハビリテーション中に起こりうるアクシデントについて理解するとともにその際の対応について習得する。

【到達目標】

リハビリテーション中に医療事故を起こさない。万が一起こった場合には適切に対処できる。

【授業計画】

1. リハビリテーションと医療過誤
2. リハビリテーション中に起こりうるアクシデント
ー心停止、胸痛、脈拍異常、呼吸困難、意識障害
3. リハビリテーション中に起こりうるアクシデント
ー高血圧、てんかん、頭痛、めまい、腹痛
4. 転倒予防対策
5. 理学療法と禁忌事項 I
6. 理学療法と禁忌事項 II
7. 医療安全と理学療法事例 I
8. 医療安全と理学療法事例 II

【成績の評価】

筆記試験にて行う。

【自己学習】

特になし。

【履修上の注意】

出席すること、ノートをきちんととること。

【テキスト】

特に指定しない。

【参考文献】

特に指定しない。

【科 目 名】評価学総論Ⅰ

【担当教員】谷 埜 予士次

【研 究 室】診療・研究棟 3 階 308 研究室

【種 別 】必修・後期 1 単位（講義）

【講義の目的】

適切な理学療法を実施するためには、評価によって問題点を明らかにした上で行わなければならない。評価とは何か？理学療法領域において障害をどのように評価するのかを理解する。

【到達目標】

理学療法評価においてどのような方法があるのかを理解する。

【授業計画】

1. 評価とは
2. 理学療法評価（トップダウンおよびボトムアップ評価）
3. 情報収集①
4. 情報収集②
5. 全身的観察①
6. 全身的観察②
7. 身体計測
8. 運動機能①
9. 運動機能②
10. 運動機能③
11. 神経および感覚機能①
12. 神経および感覚機能②
13. 高次脳機能
14. 呼吸循環機能
15. 日常生活活動

【成績の評価】

試験 90%・平常点 10%にて総合的に評価する。

【自己学習】

予習は特に必要ないが、復習をしっかりとしてほしい。

【履修上の注意】

実技も行うため、その際は動きやすい服装を準備してください。

【テキスト】

「臨床理学療法評価法」 （アイペック） 鈴木俊明 監修

【参考文献】

講義中に適宜紹介します。

【科目名】基礎ゼミⅠ

【担当教員】米田 浩久

【研究室】診療・研究棟 3 階 305 研究室

【種 別】必修・前期 1 単位（演習）

【講義の目的】

患者様に接する際の理学療法士としての基本的な姿勢や問診に必要な面談方法について講義を行うとともに臨床事例を基にした問診のロールプレイングを行うこととする。また、介助技術や車いす操作などの臨床上必要な基本技術について実技をおこなう。さらに、生涯にわたって理学療法学を研鑽する場として重要となる学会に参加することにより、理学療法士としての意義や目的意識を高める。

【到達目標】

本教科では、医療面談が行えることを目標にするとともに、医療面談の結果から最も困っている ADL（日常生活活動）を充分に抽出できることを目標とする。また、基本的な介助技術の習得も目標とする。

【授業計画】

1. 日常生活活動（ADL）の概要とその構成
2. トップダウン評価の概要と問診の位置付け
3. 情報収集の基礎知識と接遇
4. 問診の事例検討 1
5. 問診ロールプレイング 1
6. 問診ロールプレイング 2
7. 問診の事例検討 2
8. 問診ロールプレイング 3
9. 動作介助について
10. 動作介助（寝返り・起き上がり編）
11. 実技 動作介助（寝返り・起き上がり編）
12. 動作介助（立ち上がり・移乗編）
13. 実技 動作介助（立ち上がり・移乗編）
14. 実技 動作介助（寝返り～移乗編）
15. 総括

【成績の評価】

定期試験 40%、問診実技試験 40%、平常点 20%

【自己学習】

特に問診や介助法は臨床技術であるため、技術を習得し、維持するように絶えず努力すること。

【履修上の注意】

授業の中で科せられる課題に対しては積極的に取り組み、「覚える」ことよりも、「よく考え理解する」ことを念頭に置いて履修すること。また、本教科では実技試験も行うため、クラスメート全員で助け合い、理学療法士にとって必要なチームワークを培うことも目標とする。さらに、理学療法士としての資質を磨くために、理学療法の各学会や勉強会への自主的かつ積極的な参加を強く希望する。

【テキスト】

毎回の講義でプリントを配布する。

【参考文献】

「臨床理学療法評価法」 （アイペック）鈴木俊明 監修
「ケースで学ぶ理学療法臨床思考臨床推論能力スキルアップ」
（文光堂） 嶋田智明 著

【科 目 名】基礎ゼミⅡ**【担当教員】**米田 浩久**【研 究 室】**診療・研究棟 3 階 305 研究室**【種 別】**必修・後期 1 単位（演習）**【講義の目的】**

本講義はグループで本学附属診療所にて実施する。基礎ゼミⅠで講義した問診に関する事項を基に、実際に患者様に対して問診ならびに動作評価を行うことで、理学療法士にとって重要となる患者様への接し方を実践する。同時に、患者様の主訴やニーズを適切に汲み取れることを目標とし、聴取した問診内容についてはレポートを課し、適切な根拠を常に求める習慣付けを体得させる。さらに、問題となる動作に対する動作観察作成能力の習得を目指す。

【到達目標】

動作観察に至る一連の評価を習得することで、トップダウン評価を実践するための技術を習得することを期待する。また、レポートの作成を通して、知りえた情報を的確に他者へ伝達する能力を養うことを目標とする。さらに、動作観察を作成できる能力を習得する。

【授業計画】

1. 講義 接遇と問診の復習と診療所での注意事項の説明
2. A～D 問診実習 1 / E～H 動作観察演習（起立）
3. A～D 動作観察演習（起立） / E～H 問診実習 1
4. A～D 問診実習 2 / E～H 歩行動作の理解
5. A～D 歩行動作の理解 / E～H 問診実習 2
6. A～D 問診実習 3 / E～H 動作観察演習（歩行 1）
7. A～D 動作観察演習（歩行 1） / E～H 問診実習 3
8. A～D 動作評価実習 1 / E～H 動作観察演習（歩行 2）
9. A～D 動作観察演習（歩行 2） / E～H 動作評価実習 1
10. A～D 動作評価実習 2 / E～H 動作観察演習（歩行 3）
11. A～D 動作観察演習（歩行 3） / E～H 動作評価実習 2
12. A～D 動作評価実習 3 / E～H 動作観察演習（歩行 4）
13. A～D 動作観察演習（歩行 4） / E～H 動作評価実習 3
14. プレゼンテーション（実習から考察した問題点）
15. 総括

【成績の評価】

定期試験 30%、動作観察レポート 30%、実習レポート 30%、平常点 10%

【自己学習】

患者様への問診がおこなえるように基礎ゼミの講義内容を再度把握しておくこと。

【履修上の注意】

本講義では、理学療法を行う上で重要となる問診技術と論理的根拠に基づいた問題点の想起を実際の臨床で実践できることを目標とする。実際の臨床での理学療法の流れを体験することによって、理学療法士の在り方を見つめ直すこと。なお、実習では実際に患者様に対応するため、特に接遇には十分留意しつつ、積極的に取り組む姿勢を期すこと。

【テキスト】

毎回の講義でプリントを配布する。

【参考文献】

「臨床理学療法評価法」 （アイベック）鈴木俊明 監修
「ケースで学ぶ理学療法臨床思考臨床推論能力スキルアップ」
（文光堂） 嶋田智明 著